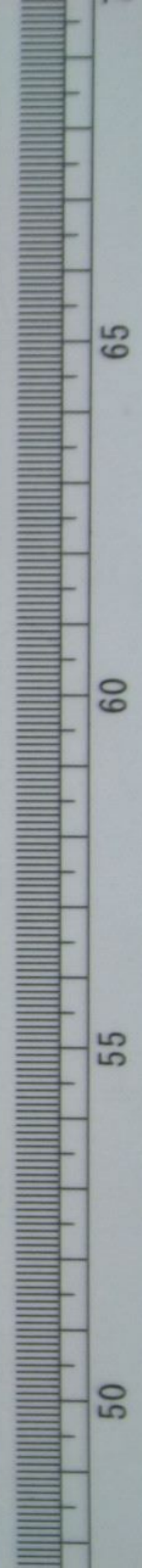




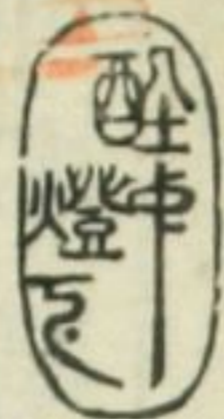
~~D~~
1032

逍遙文庫
文庫 6
975



五三三

文庫6
975



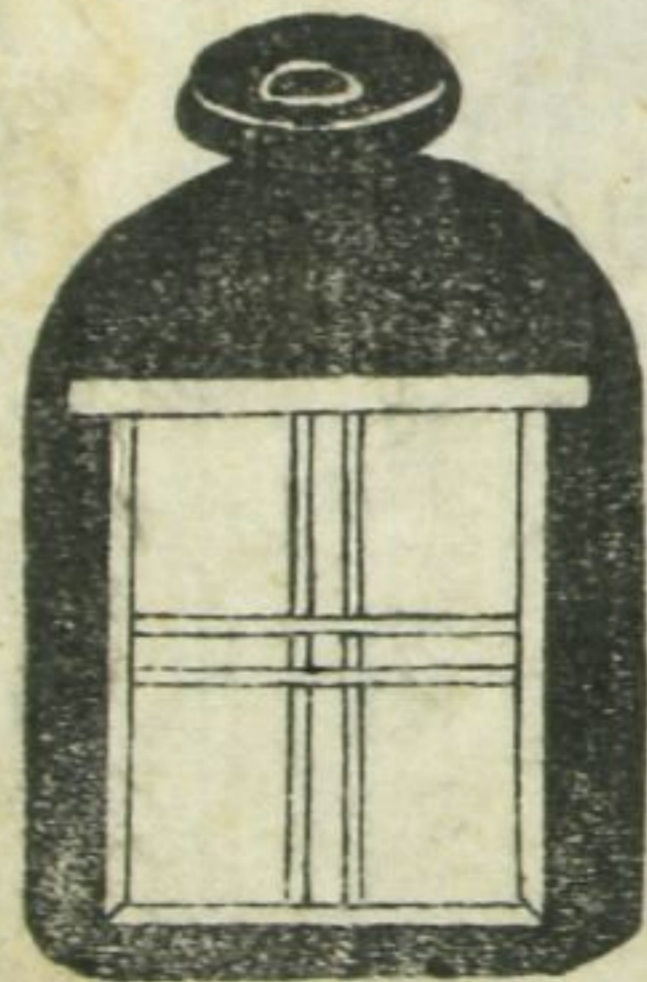
得失榮枯總在天

機關用盡也徒然

人心不足鼠吞猫

世事到头猫捕犬

傾當焚勢西窓燭
邦語巴山夜雨時



中武義ひらむ凌草あさくさ乃隱士ひんし

振鷺亭主人



筆ふで戎きん金龍りゅう山下さん此

僑居きうきよふ操とくる

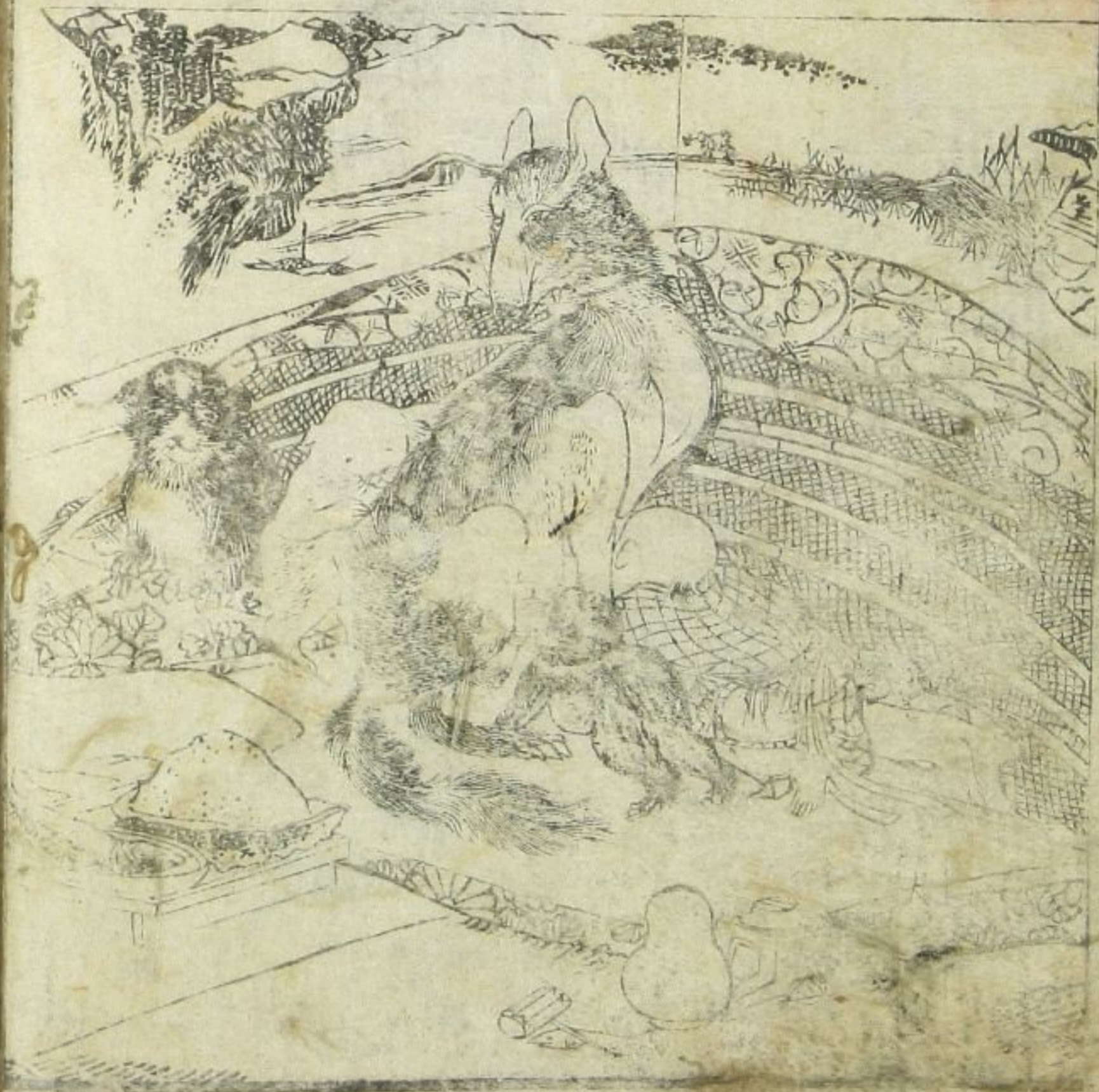
八郎やっぺい太郎たろう政昭まさあき像ざう

為人義撥
威風凜々
面色如玉
身長六尺
容貌魁偉
皮膚肥白
膽氣如烈
火時年紀
十有五歲



○ 犬の恩

難波の阪助孤子
半飼の犬お托して
乳汁をふくめさせ
佳食は與へてその
恩を酬い遂に奇見
犬ち即以生る
するの圖



礼

伐柝羅天將
本地得大勢
成ヲ司トラセ
給フ神ナリ



又阪助



主夜神 婆珊婆演底

此咒唱レバ鼠賊
神障導ヲナサスト云

盜賊鼠偷二

鼠偷



不

北方之魔神也恒
毘羯羅大将所降伏

鼠賊夜叉神之像

猫乃仇

於讚州小豆島八角犬太郎討猫魔圖
奉讚州象頭山金毘羅大權現懸繪馬



東都路齋北馬畫圖



廣賀
堂藏

敵討猫魔屋敷

振鷺亭主人 著

○大乃恩

高臺于外而見則煙起民之竈者贍爾兮里と
 仁徳天皇の御製も々々雅波比都へ往古より
 花の比とどあまらるる安ふ橋忍大坂長町乃ら
 徳家又阪助とつるとのあり生泊篤実よりて正
 直乃乃ふやとる紙屑買成世の笑とほて務小あろ
 ぬ乃とともとかくしあ日せよて集も雁道とつら
 一川まぬを遠く遠なる中に集のお虫懐妊一と

珠文雜産たまごのどを阪助さかすけも数業かずわざをやめてお夕乃
飯系成いひ煮しは七夜しちやのうちまがも又紙屑かみくず買ふと
出ふる集つまへ夫おつとのぬを成徳なりとくとむととろ細く
我身わがみの悩なやまをせとくくはしきゆもわつと川産かわうま
糸いと子を捲抱まきかかき淫乳えんにちのち捲まふうはくくと睡ねむはけが
誰たれやん紀きふくと擡あてをのあり毎まい夜や初はつ心こころふせを
さもまじふとて声こゑも我わが血ちを見よやつとつふ目成めなり
遠とほなるふまといふ日ひは可か毛けは白しろ三毛みけ猫ねことの夫おつと
五尺ごしゃく胸むねとありてとんとまゝが尾おしりへ二股ふたまたまふ割きる
次つぎは口くち鼻はなもとまで裂さ裂れ碧玉ひよこぎょくの玉たまき眼まなこを怒いかしてを

取と法りもさる肺たもととさ事こと並ならへ一目ひとめ見みるより叫あはれとつて珠たまご入い
まがも外と面めんの方かた逃にげ出でんと世よ處ところ成なり得えの猫ねこもちも
が喉のど咽のどふ嚙くはつとくく一口ひとくちふ喰く教しぬは付つありとあり
乃者なつものども留とど務むふ出でるるむむ誰たれあめく知しるものも
なろける身み阪助さかすけも初はつと神かみさぬ紙屑かみくず買かふ出でると
魚いさなが知しるも何なにとなく我わが血ちのち糸いと束ちんとらまはつらりも
よく立たぬりなる小書せうしょの血ちも流ながれてお倒たふすおころこと
いうふとつとるよそや喉のど咽のどへ剥むきとれととどくなとて何なに
うの息いきののよふべきあなれた配はいをいふより阪助さかすけ
中なか狂くる乱らんのどくま川かわ居いつ身み成なり関せきへ世よを骨ほね陸りくふ

徹とほて歎なげきらるど程ほどからうお借かりのを乃も集めて
さあぐ會議ぎとまじも何なに者もののあらずとも知れざらず
先まへむねまるのを意を末のたのことうにしこう
阪さか助すけをいさえ書かの亡骸みせの夜千ち日ひ小こ送おくりと
毎ま夜よ乃の爛らんとうふらるさても阪さか助すけの書小こ日ひ送おくりと
しらふ忽ちひとち心こわれき身とうり七夜よの脱び
引ひく初七しち日にちの遠夜とのあれども乳腹ち子こ
ふのこまて此何なにのせきにも出さざらずたや一つ結むす乃
終はりして何をいふ供をききも後のもなく我身み
の長らさるるならずまハ乳小ことまじく瘦やせかとり

昼ひる夜よなくりさすにやぬさまいのいちじこ親おやの身
みとまていうたらならん阪助すけ種たね小こ魚うまさらへうらう
糸いとども我子この乳小こ肌は肌は成なるくへ胃を裂くを
あさくく珠たま血ちの涙をなじの糞うんの雉子す
の雛を育む凡情せうよてあまれたかなきまささぬからう
さても又阪さか助すけの日志しる班の女大お成なりはまりが
何なにのも次つぎ自みづか分の食物を日ひまてあさく神の外
ふらむんらうはは彼かの大おの尾成ならうさて阪さか助すけが
出で入い入いを慕ひ登長なが門かど口くち成ならうまじべーく年ごら
居いるまじべにはけならうまじべーく年ごら

阪分むとてかぬびんふありひ我家の様乃下よ
入並るふはた書のお並と同日に産一と
極り一阪助が書へみぬりたへやむくと極
の下までうとあとい七八隻の子たふ乳をふくま
てもあさぬ成阪助はくぐと見や匠が頻あうら
やま一りかろてたよ對てなるハ班よ極が子ハ乳
あつてああ日せぬとせども我子を見よ母ハ肥業ふ死
て乳よたぬ是如此よ瘦不とうこれと我身食く
くささるにやぶきものさてあき折あく近道ふ
乳をりよぶきあとならば今ハ見六匹にす

よそ外なく我をかせたよ出ずしてかくてハ臥て死ぬ
なきもう我死ぬるいとを結ともいうふても我子極
びんありさうとて諸合をさきおまとなく年久しく
胸ぬる三毛猫さハ我費しきを足添うて何地坊ん
新由なり一孫よ猫ハ三年胸まくと三日のおん
と知たハ三日胸まで三年のおんを去るとむり
うりま信これバ太ハ義成志のりおとよ極よ極
と我とハ毎以るしき別條そ我あんの下よすぬ
ハバ別我あ乃者なりいハおはせつ我をすふと
とひて一つの死をぬへくまきと真実ふいひ

凡そ彼大^{いのいぬ}會^{えん}始^{はじ}り^りなるやうとて^をむ^むこ^こら^らん^んを^を
強^{うまづ}し^しられ^れば^ば阪^{はん}助^{すけ}さて^てハ^ハ安^{やす}そ^そ遠^{とほ}し^しや^や先^{まづ}希^{まれ}し^しを^を
乳^ちを^を辨^わる^る多^た地^ち戎^{じゆ}走^{そう}る^る獣^{けもの}も^も親^{おや}子の^こ情^{なさけ}を^を志^しる^る
とい^いべ^べい^いふ^ふお^おの^の且^{かつ}乳^ちを^を我^{われ}子^こに^に飲^{のみ}せ^せく^くま^まし^しき^き
や^やこ^こそ^それ^れバ^バ我^{われ}子^こも^もお^おい^いち^ちら^らび^びく^く我^{われ}と^と世^よせ^せき^きは^は出^いぬ^ぬ
バ^バ親^{おや}子^こが^が命^{いのち}を^をも^もは^はな^なぐ^ぐとい^いふ^ふり^りの^のも^もく^く嫌^{きら}は^は
命^{いのち}の^の大^{おほい}恩^{おん}ある^ると^とよ^よと^とむ^むとい^いふ^ふ人^{ひと}間^まに^に語^{ことば}る^るが^がむ^むく^く
も^もこ^こそ^そら^ら驚^{おどろ}く^くとい^いく^く候^{まじ}と^とも^もの^の良^よきを^を合^あせ^せら^らし^し
ハ^ハ彼^{かの}大^{おほい}畜^{ちく}生^{せい}う^うとい^いく^くも^も阪^{はん}助^{すけ}が^が感^{かん}激^{げき}の^のと^とむ^む戎^{じゆ}
は^は日^ひも^もこ^こで^でらん^ん乳^ちは^はす^すぐ^ぐら^らお^おる^る子^こな^なを^をお^おし^し

たま^{たま}く^く撮^とる^る下^{した}戎^{じゆ}た^たい^い出^いて^てが^がや^やそ^その^のか^かく^くと^と驚^{おどろ}き^き乃^な
と^とよ^よあ^あぐ^ぐり^りそ^その^のほ^ほく^く毒^{どく}子^この^の傍^{そば}に^によ^より^りて^て横^{よこ}に^に臥^ふす^す
そ^その^のさ^さぬ^ぬ僅^{わずか}は^は乳^ち戎^{じゆ}を^をく^くま^まよ^よとい^いた^たぬ^ぬた^たら^らの^のあ^あり^り
こ^こま^まな^なも^も止^とま^ま阪^{はん}助^{すけ}さて^てこ^こと^とい^いひ^ひは^はか^かる^る我^{われ}子^こを^をこ^こ
出^いて^てた^たの^の乳^ち糖^{とう}に^にあ^あて^てこ^こよ^よら^ら子^こへ^へ忽^{たち}ち^ちは^はや^やこ^こ
す^すら^らく^くと^と乳^ち汁^{じゆ}を^を吸^する^るぞ^ぞ志^しわ^わじ^じき^き阪^{はん}助^{すけ}くる^{くる}
殊^{ちゆう}勝^{しょう}の^のよ^よさ^さぬ^ぬを^を見^みて^て今^{いま}さ^さ奇^き異^いの^のこ^こひ^ひを^をほ^ほつ^つて^て
お^おも^も此^{こゝ}の^の人^{ひと}よ^よと^と語^{ことば}る^るを^をや^やを^をた^たえ^えし^しる^るお^おそ^そ日^ひ
よ^より^りて^て彼^{かの}を^をあ^ある^るひ^ひと^とな^なく^く時^{とき}く^く撮^とる^るの^の下^{した}よ^より^りた^たひ^ひ
出^いて^てお^おの^の乃^など^どく^く乳^ちを^を食^くら^らぬ^ぬさ^さら^らふ^ふ人^{ひと}間^まの^の母^{はは}子^こよ

夏なつのついでにバ阪助一腹の若衆わかしゅを休めて大ひは喜よろこ
びの寝ねかゝりかゝつて申月しんげつあまりもさるさるふある日ひ様やまの下
俄ふともさるぐくみ大いもおびうとくは解とふそのしを
考かんがめうりて何なにのよと阪助様ばんすけさまの下したをえりりり
彼かの大七八ひき隻ひきのふたを休やすむは寝ねこじり阪助大ひは
呆あきれてくるもあは彼かのなつりくと雪ゆきの上うへもあがり阪助が
ふも乳ちをふく使つかがらふりてお志しが志し首くびを枕まくらと
てやわう阪助ばんすけ之の想おもひのふをふしつるよと吃くつも何
ゆよおのどがふを囁ささこじらん畜生ちくじやうのあさ飯いひこよと
とひおさるふその附つりたや様やまの下したもあつ川がはと入いり

さであれば阪助心こころづきぬへぬ乳ち母ははをりて申まをる
ゆかおのどがふ成な教こして我わが子をたえらんとする心こころや
さてゆく人ひと間の忠ちゆう厚こうとも及およぶべとて感かん涙なみをぬぐく
大い愚おろかを厚あつく謝あやすかまはるるふたの善ぜん徳とく而し
のさふ桑くわんをぬほし後のちは彼かのなを夜よつきそひて後
ふ乳ち母ははのむくけりづきりまふり又また母ははのどひよや
乳ち母ははをふりんでむぬく睡ねて或あるの遊あそ戯びかなとく
世よも流ながるるるるに阪助ばんすけ今いまの衆しゆ人のどひをば我わが子
をたふあらまあき心こころなく低ひ屑くさ買かいもぞ出いるるるらも
物ものなる附つへ又またぬをこのむとよとそ大おほの首くびと枕まくらと

己度ちどを小おの編あきけき菓あきけを買か来きりて彼かの太ちを馳ち走そう奪りん
とるの斜うづららうさでる実かや嬰えい児いの生せい長ちやうをるの目
月つきと共とももたや七しち月げつのなはずく遠や不ふどにる八月はちがつを
さち九く月げつよもなうぬまむとたや乳ちかきとくも
三さん月げつあがらぶく阪はん助すけ張はらんを中ちゆうをえくおりのやう
ま止とといよもた乃な大だい恩おん我われ子の有あるまはいこの
して食物じきぶつ余あらやうよと日ひ夜や務むとくも勉めんよ
角かくよままに合あせあーくある日ひ大だい坂さか中ちゆうをまより
く豊ゆたかの屑くずをも買か出ださど暮くるめ及およびて多たくは乃
五ご七しち町ちやう成じやう通つうりらるよ奠たてまつ座ざ一いつく位ゐより

家の内うちよま若わか侍さむらい立た出だく紙かみ屑くずや賣うり中ちゆうぐーと
いよ阪はん助すけそのまう二十二じふに又また一いつ件けんの紙かみくずが
買かりその目めは是こゝろ成じやう通つうりとく我われ家うちよま海うみを
とりしがさうの紙かみ屑くずなぐ志しらえらる中ちゆうより何
せん及および吉きちめ法はうくさくもの出だり阪はん助すけつこを
舞まく開ひらきえらるふ九く十じゆう兩りやうの合あひなまを阪はん助すけ
こましくいふと所ところを渡わたして大だいふ果くわいをせしうえま
正ただ実じつ無む慾よくのを乃なるまはを怖おそく思おもひて振ふるひ出だし
是こゝろへらの侍さむらい開ひらきしにえまされけ合あひなまを紙かみ屑くずの中ちゆう
まぎ道みちこぬせしものるんり一人ひとりの合あひなまをよく

樂あそびふるをさくらさば却かえりて罷つかせしむとらばを合あひ
西にしゆるとして世よとくもさるるありさして大会
とらふもあつねば後日ごじつの沙汰さたあはばとて何なにれど乃
ゆあらん我われもきやうふ討うちらんとんほどいりるげん
お後ごらぶぐげと申まをされば阪助はんすけ忠告ちゅうかうがとへよをじに
さすともと思おもふも程ほど心易こころやすくすして忠告ちゅうかう人ひとも強つよな
かゝつ申まをせしと後ごらの存ぞんなまははくまを迫せまり隣りんの
人ひとの誼ぎもあつねと申まをひ壁かべとなす一人住ひとり
願ねがひ西にしとらるる乃なるらん者もののあまよまらう伴ばんのあり
やう成なり終しまりまはば死し病びやうはくちあつひ合あひを捨すて

さの苦くる者のゆいもあるねど一い連れんのらうと
天道てんたう成なり及およびとさるるゆとじさればとて吾われ合あひの
西にし國こく方かた乃なる信しんとぞうあていつくをあてよねゆ
れもちゆんやうもなり却かえりてを自らり為なる来きべ
きたらぬまは先まづ止とどめにも合あひ子こハ人のらつ
さちやうふ権けんのうちにとと收おさめて拵とんと
申まをせば阪助はんすけ合あひを推おし乃なるくあにゆり西にし
が申まをえのまよく合あひ子こ以も権けんのうちふおさえを
しつとあつねりなま合あひの番ばん人ひとやとす夜よの心こころ
秋あき心こころとなすて差さもむまをす知ちとく親おや出でるあ

の五右衛門町の証人^{シヤクシヤク}も治来^{シヤクシヤク}のいっよや阪助^{シヤクシヤク}を
拾ひ^{シヤクシヤク}いふふらう款^{シヤクシヤク}なる可^{シヤクシヤク}券^{シヤクシヤク}さよとをいさて
おき我^{シヤクシヤク}亡父^{シヤクシヤク}の年回^{シヤクシヤク}あつてこはばんとするの重^{シヤクシヤク}
のうちをこゝらゝとして一重^{シヤクシヤク}の牡丹^{シヤクシヤク}縣^{シヤクシヤク}を信物^{シヤクシヤク}と
して無^{シヤクシヤク}へたをくよのこまで又外^{シヤクシヤク}こへしてを出
ゆき^{シヤクシヤク}の阪助^{シヤクシヤク}のまづせ給^{シヤクシヤク}あつて牡丹^{シヤクシヤク}縣^{シヤクシヤク}を
擅^{シヤクシヤク}よとたつての合^{シヤクシヤク}子をみるも付^{シヤクシヤク}出^{シヤクシヤク}ん由^{シヤクシヤク}き
あゝと又我^{シヤクシヤク}おんもんを報^{シヤクシヤク}まつとをいさ
如^{シヤクシヤク}素^{シヤクシヤク}かうと一^{シヤクシヤク}らよ志^{シヤクシヤク}どるへ我^{シヤクシヤク}合^{シヤクシヤク}子をいさ
をわゝむあへあつてま今^{シヤクシヤク}にも付^{シヤクシヤク}出^{シヤクシヤク}に合^{シヤクシヤク}せ

ん時^{シヤクシヤク}僕^{シヤクシヤク}もまわなればむといふ合^{シヤクシヤク}子の要^{シヤクシヤク}心^{シヤクシヤク}
合^{シヤクシヤク}子の志^{シヤクシヤク}復^{シヤクシヤク}加^{シヤクシヤク}復^{シヤクシヤク}あつてと志^{シヤクシヤク}どあつて相^{シヤクシヤク}
ま出^{シヤクシヤク}んじとまゝいふの大阪^{シヤクシヤク}助^{シヤクシヤク}の旗^{シヤクシヤク}をくとい
く志^{シヤクシヤク}きやあつてと志^{シヤクシヤク}どるへ我^{シヤクシヤク}合^{シヤクシヤク}子をいさ
てらうあ志^{シヤクシヤク}はあつてと志^{シヤクシヤク}どるへ我^{シヤクシヤク}合^{シヤクシヤク}子をいさ
我^{シヤクシヤク}も志^{シヤクシヤク}にありと志^{シヤクシヤク}どるへ我^{シヤクシヤク}合^{シヤクシヤク}子をいさ
今日^{シヤクシヤク}を送^{シヤクシヤク}るかぬなりよりく我^{シヤクシヤク}合^{シヤクシヤク}子の小^{シヤクシヤク}豆^{シヤクシヤク}を
買^{シヤクシヤク}てきてこびてんかこの旗^{シヤクシヤク}擅^{シヤクシヤク}おの合^{シヤクシヤク}子をいさ
合^{シヤクシヤク}子の戸^{シヤクシヤク}も合^{シヤクシヤク}子の用^{シヤクシヤク}をいさくも合^{シヤクシヤク}子のむなり
とく^{シヤクシヤク}合^{シヤクシヤク}子の志^{シヤクシヤク}まらん天^{シヤクシヤク}秤^{シヤクシヤク}ふ

流と中よりあはれれば何となくんが里の首途まで
後乃あはれと志ら紙の恩を反吉の買出し
ふ荷を引搦てぞ出ゆる

○鼠の偷

妻小隣家乃願西ハ之棄亡頼の惡徒かうるが
後乃母をうつきて阪助が今つぬやき一成はを海し
るとの間をえこそ表の戸ハ候あまバおのが搦乃
下ふらまう入床下を忍びやふつこひて阪助が
後居の内もせひ出し処ふらの大ハ思も乳を食
えて睡おるが於西が睡しきてるをえるより

こけりあつるふらず於西人や知坊まかな畜生めと
謔つた檀をえよバ牡丹候成候てありらよバこれ
おど口をえみとらするとく牡丹候を與へるより
々の大ハ見向やぞいよ、吼養る於西ハ怒ら
金子乃賊赤を首ふくきてさくらバ我を相侍
せんとも牡丹候成一口子喰ひ脱ふ操の下よ外
へんとともるをの犬吼怒て飛くまらまど
於西志や畜生をと育あふ捺刃とあらぬてあ
一突子突は是バ大ハ胴腹を突ぬる是一声叫び
脚受ふ死しそらり於西哈々とお嘆ひおの是

牡丹殿とくらたげあたら命を捨つるよ我又突
一いつふどしとらの牡丹殿をとらてらひなるが息ち
口中うゝ絶血絶去く逃して牡丹殿を生り
吐出し五臓麻して赤魚より夢もさずさ
目を白くはしりて七轉八倒してのころち
むともし若き死ふ死する自業自得報乃
弱を悔しき日阪助ハ苦身ふたりに我が
妻も悔りるも以ての怪有るとき啼泣よ何のそと
まぎ戸を引明く足直む於西ハ血を吐く死
大ハ突殺さ且苦みりきしてはるはを阪助

大ぬ獲きまハ大の獲りてと獲らるよお借
乃者ども弛集りひるさぬをるよ於西ハ阪女
ガ石指の金銭布成る甲に怒てわらまバ難も
なく盗ふ入らるよきこはり大ハ吼るい切こ
されらるよお遠方くるさるも於西ガ牡丹殿を
喰ひ血を吐て死るよと入るハ牡丹殿ハ是
大毒を入あきしと見ゆ何さぬ牡丹殿こそ仔細
あらし免と會議をもよひ牡丹殿ハ今約五右
町の忠作ガ持来りさしてハ阪助を毒解を
阪助ガ為るよハ借殺の証人なるハ殺銭金も

ふあのが方より引死べきお治が巧と知まうさへ白鳳
お治を捕まるとしては五人の仕者ども五高の町に
引まらるがりとやみずするもやと表もむくさせ
先におまかしく一人肉をへくお治用こそあまき
とて身を引まを思治らぬとてとてとてとてとて
乃道を一入つと考て後抱おむと引組控倒
さんじ又一人足を捉り引倒さんとかりらるる
不思議やお治がその巖洞乃とくすらくと
脱出せつらくと柱を登り架成はひてそ
息ちのき消ぶく共おけりんとまきいふと悟る

はくも茫然と果して外高にむ之者を表
より戸を引まらじゆらくもとて逃出入んと高次を
はくもお治の下乃なびよう白鳳出る逃走しとて
こののまかりしがさしてハお治白鳳の幻術を借りて
つるが徳形の御よそ人乃眼をくらはは逐電たじ
乃ののかりと人と人々奇異のまひをぬいよく
お治と於西が悪事かくまかしくは人ふくま
さのハなうりも高次女はくもとて思はれお
機なまきとて太乃お治をバ檀那寺にお送
前頃埋まらる太の塚に葬りて累七乃吊ひ

最^{いと}怒^{おこ}る^まる^るが^たも^も別^{わか}れて^より^大い^ひふ^れを^ある^世
う^ど思^{おも}は^るに^あら^はた^や乳^ちの^いも^も日^ひの^あは^れし^生長^し
て^名を^もた^たき^身と^号と^号と^号に^あら^はせ^しめ^え来^来陽^陽黙^黙乃^乃乳^乳
汁^汁成^成なる^しひ^まや^精氣^氣運^運く^あら^はし^ちて^乳も
七^七歳^歳も^もな^らり^あけ^り阪^阪女^女我^我見^見ハ^健の^生後^後と^と
そ^そ身^身通^通ぬ^らる^とぬ^くる^は是^是痿^痿志^志を^とて^乳所^所
自^自由^由な^らず^おの^はは^く世^世の^美と^ちの^くく^く
遂^遂も^親み^人の^門も^まら^うつ^まを^おじ^らる^る
知^知る^{もの}ども^阪女^女が^行歩^歩の^かな^ひご^きを^知か
の^穴を^身身^行行^の足^足を^女抱^抱か^つる^をあ^らは^しま^す
と^て猿^猿物^物車^車成^成く^くあ^らは^しま^すと^て大^大を^身身^此此^れ
ふ^りして^又を^車の^のせ^て大^大坂^坂乃^乃街^街巷^巷成^成成^成あり^き
流^流く^節あ^りふ^まは^をう^さひ^或の^住吉^吉海^海乃^乃と
栖^栖と^{して}ゆ^き乃^乃人^人の^體を^むら^あら^はし^ます^大を^良
身^身の^ハ遺^遺傳^傳成^成纏^纏へ^も目^目赤^赤眉^眉清^清く^くと^まら^しめ^る
法^法の^色あ^らは^しま^すと^て白^白く^玉を^敷く^容貌^貌な^れば
え^ん人^人を^あら^はし^める^體と^なら^ず一^一沙^沙二^二沙^沙の^好
か^せぎ^るを^のハ^なら^りる^をの^ケあ^らは^しま^す法^法乃^乃
の^怨多^多車^車と^て人^人と^あら^はし^ます^沙ハ^{その}日^日釋^釋
に^あら^はし^ます^女な^らず^く樂^樂信^信活^活の^あら^はし^ます

とて猿物車成くくあはしめると大を身此れ
ふりして又を車ののせて大坂乃街巷成成ありき
流く節ありふまはをうさひ或の住吉海乃と
栖としてゆき乃人の體をむらあらしめ大を良
身のハ遺傳成成纏へも目赤眉清くくとまらしめ
法の色あはしめると白く玉を敷く容貌なれば
えん人をあらはしめる體とならず一沙二沙の好
かせぎるをのハならりるをのケあらしめ法乃
の怨多車とて人とあらしめ沙ハその日日釋
にあらはしめ女ならずく樂信活のあらしめ

身ハ罪人^のれども何にふは由^と又^しけ^が娘^と田^{ひき}風
乃^らん地^ちより^も改^めて^は重^しき^に湯^あを^ごひ^きま^いら^ば
今^もハ^この^この^こす^くな^くま^くま^いら^ば阪^あ女^を去^り弟^を
賜^{たま}は^しひ^をな^じて^中なる^ハ我^もも^や此^度
母^の産^まれ^ば何^者と^も知^れず^に殺^害さ^る
あ^らふ^てあ^らふ^まき^宛約^をと^らず^らう^に任^ます^とい^ふ
い^らり^て生^まる^に長^なき^を母^が教^を討^て後^の
妾^を殺^すと^らす^に返^し二^つの^ハ我^もも^は持^たぬ^はは^ら
十^の箇^の合^をを^保ふ^あら^うなる^は合^をを^と

え^より^我合^をに^あら^うぞ^と誰^とも^もた^ぬも^と
包^乃及^吉子^徳又^守川^那小^豆徳^と書^はは^ら
あり^はこ^の成^るが^として^後使^をと^らう^合を^を
乃^主を^尋出^し冊^合を^を送^り返^しく^まよ^さ
それ^ハ我^の家^のか^があ^らう^の喜^びは^らや^ある^に
合^をを^合子^ハ人^乃室^とを^思ひ^冊年^月徳^を
妾^を甚^くお^のせ^ぬで^身を^投首^成て^死な^んと^まで^て
思^ひは^らは^らる^にも^をつ^まあ^らう^にく^わく^わ
罪^人と^なる^まき^をま^でも^うく^て終^りに^あは^らし^まり^な
今^は合^をを^とら^う大^人を^用ひ^らる^ハあ^らう^に

たをるゆもあつて道と我命はくても咄合ふ
を持てふ送つあつて念ふはあつては
奉意をこすく車なうれとぞ言つては
はるぐつて母の仇ハ天も舞で地成るまで
為出で奉命を盡し中さんかぞ想ひきハ又の
病ひかろ海云及る合もせよ命もろる宝や
あつて何とぞ吾命を人參代も立替て今一度
奉後なりあつて我身とせや生長させバいりたる
艱難をいとしぞ幸き世をかりし十兩の金
をバ債ひまらふ返しまつては天も地も

むとりの又みえぬ道まの世我身ハ誰をゆるかり
ゆるりぞやと涙をそらつて中らば阪女
以ての外ハ服法は作さよりのふ甲斐なきん底お
てハ教を討りも是れ東まゝ又命を何とぞせん
我生涯かてそれいも非乃乃怒をなさせバ又了せ
かく路路ふさぬよの記をもと天道理おひては孫ハ
うらみず業をかりしはねお多て人の物をむさがるん
あるびらびとくまぐと教訓うらむはたを良へま
吃してお志は道法教をえせどとさるば道命散と
その素早てまゝはとつはみ出めらるる表

ある阪女けりろ歩をえ送ててまはし今生の別とと
親も乃名強かーまて悲歎の涙よふまらぶか
や大を師をての親もてまは乃のわさやも
てり大もや嘆まやすんさやなごう大を良が考ん
天もあきいへくさき成あせめん我はそや定所
かど乃薬よて和詮いきのぶぢき命とも見えす
なうく死病とあひあきめれば大を師もも
苦勞とさせぬ末魔のくやとせんうらハ一割も
そやく往生を遠びーと憑て是怪ハかうなごも
我子の輪廻にむきされておくらんを観念しつ

終ふ言を嘆てぞ死るるハ哀かほしうもかう大を良ハ
新ととさす急ぎ薬成あてぬてぬてもあるよ又が宛
病乃有さぬをて何ハ候さんそや事みれと
見え天も焦ま地も叫て歎へいせんあをなく目も
あてしとぬ次あうほりくハ近迎のりども大を良を
なぐさちすじ又が死骸をバ大坂の檀形ちあおらや
ふ大を師かろくも聖道の送を乃哀をバ見聞人
共もあをまてりまはけりも一箇の武士大を良が
病人を監定して良人も取巻一が事あるよ何せ
泉見塚もかくなき萬人歎見龍と号する云法

者の家子奉仕させりるる大を良は教ふる七通余
勤仕私るく世の暇もは夜食成りてまで日夜
舌法獲ちた意やころり及は天性の女機を養へ
百物ふ磨の如く始り見致さきりるる大を良
て中なるへと一一隻の太身染れたるに角八方と丸
圍まると時雙眼を配く敵みむる必死の形状
構ふる老景なうに方八方も世の間もなきこと
よく舌法の妙なるに大を良が精神のたふ
むじく各詮自性の理やかなはみ素八角大を良
と名づるべしとて就十五歳の春一流の秘傳と

出づ授て印可せしむるされぬば方もある
後にお女を良の夜の夢も父の阪女眼も血の液
をそぎ習の面色も存せしや十五女にもうけいま
ご母の敵をも討て命をいせしやなさをし
父が母執とるまうとわくは國も成て大を良
道とて是れさるる大を良の秘傳も我
十五女にも及びて父母の宿願を達せざるは
の力守りてありと見致すも密を告て暇を
を儀も歳取長し愛乃若るまをめては國遍路と
是れは心の境もなれしやしては事をも波の接路

こゝの執る浅路傍かよふる鳥の啼きを
頃唐や明石波の捲乃うつふも歌よあそび大物
の浦和田の脚傍のゆくさきにりつかなきを達
なハ驚るもぞきれ灘わるとや名もさる所の浦風よ
善帆の退風と日数経て浅枝玉丸を港よぞ
云に乃白かくて大を扉ハ船をあがりてまふ
ふ糸借一昆比羅大権現よ初抄言して一ハふた
歌のゆきをを尋んる二ハハの合ふ乃主と又福の
云のハ又母善挽の巻目必尋んると志一ハあては
僕良ハ弘法大師誕生の地なまハ玉中洲るくま

むく回アと進より伊豫上佐備岐の異場を悉く
順礼しては國邊路をお納しうごも遠み歌にもあが
あそびして本意なくも失より佐藤の玉思傍が傍よ
渡りたるうは國の難而み星を損せが今一寸も引ご
八浦といふ所よ初懸く漢士の数も舎にみあやの
老婆も慰よあそびんらうびも救日星を体めたるふあ
家の事いふる漢すきてえたるハ旅人長の旅をひきて
あめかたひひくしてハ最の世きりつるつみ妙やあり
洋中の湖よ足を洗ふ時ハ立地よいらる痛をこ
愈すも妙ありとぞ我齋も負て付ひ申さんと云ふ

大を扉ハ大ふ喜びの漢乃りゆまらせてやぞ出候よ
つこりもふ渡り迎ふ有つる漢舟より来てたの沖ゆ
漕出せが休ふ漢漢漢たとして巨漕洋浪りのすさ
まどきおるぞ列アレるごころそよき浪ありとらやたを
ゆるるくまを海に浸さんとする雨をの漢賊をおり
とらてさんぐもあすなり世時浪あくる舟ゆらめき目眩
免き獲獲とらぎと高とまてうおすくらも大を扉
勇力獲と輕捷ふ遠くはらうとも瘡とらふ大敵もハ
かぬひごころとむらうと思ふとくといわて牙成あ
せむむらうわらうの漢ハまたぐ漢をぬて大を良が骸と

ぐめくと責をよめて何々と笑てりよ只今你と
海ふおぬる魚扱小菰らするなまは宛船の引
寄ふくこアアをこべりてとえ来りの家よ家ありと
なりはるハ腰が十両あぬア合子を持てるをえこそ
いつぞハ集れんとのとと計且どもそむぬとゆさり
你がとめり合せしこそ香ひ我腰を短教して合子
或棄てし你が殺して合子を盗り逃さしけいそて
なして你が骸ハ海の底に沈てまへバ誰かあるあ
衆然とるとも我物あるは後日の男となくこそ
我身を金ふまを計畧なりいらふ骨尾好機屋

うすやとりのさぬは状あぢてたこと 踏倒こ
大を良艇に倒し沈る海よのぞきておひなるハ我今
ハ命のきりこたはし不持の命子を以て此奴を説く
命をとりてうど十あなまはばあぢあぢて命をこまけ
るもあらんさまれば我奉るもむらうびの腹あ
命をもすらふととひひるがやくは命をハ人の
物かりとて又義を金織るあまのたのハ多代
ふさく用ひばてまきく親を見ごらる命をみるよ
ふとして今その命子を命をこまけるハ乃よあぢ
とにもかくふと不宣の末なりとあきらめ眼を閉て

観念せどやうなるふは耐うの漢をうくと破して
大を那ががごの重石とほやがて溜まら浪よさん
娘とあぢとてはハを助心なりなる次あかり

○ 猫の仇

此時大を那ハるるのそこよ沈し鳴呼孝ん
天よ感心海の底までも通らまんいさして連切て
破ハまづと骸ハとらくと波の上よ浮き出さる大を
元来氷凍ハ破されどもこの徳もつらんいのを
八大龍王候を至て昆比羅大権現擁護の
力をとさせ給へ事在大師遍照金剛と

伏奉して大坂の奉行五奉行町といふ所まで
澤邊は後足の日事營々用金十兩を笑ひ
いふに捜せどもかいらまを結ぶ用金の内ま
ばふ是のてハ何とやらん後めごく中使もま
既よ切振せむやと思ひし不意君情厚く何と
賄とありて己我をまより以家の下約とあり
年々も務銀成結しと免いふ由て主君の合子
を償むやとありまとうと多病おつきて費用多
新形の若もむろく思ひ十両の合子個
今も奉意を盡せすと首をさめて後日大を

始終成さくも亡父の行りおきしと
符合しるはばさてはけ人を召置又も紙屑と
若侍ありりよと大も喜び何れもなき
何もても後授けらるるやと同あつた下僕
としていふはまもそのせら上色の
自らもて後及寧川郡小豆島と書つ
とふ大を廊下をばをばいあくらの
以時懐中より伴の十両の合子と
といふもの下僕合子とて上色を
の自らもまされなるるは

年の間との節乃と色うらつのまゝよてくハ有ありとして
あまあま呆あきたてて不ふ寢しんをなす時ときは犬いぬを郎らう十五年
双ふた糸いと又また乃なり阪さか女めを斬きる所ところよて紙かみ屑くずを買かり中なかより
は食くふを拾ひろひ出いし臨りん終しゆうのきこままでもまおおゆるとせず
又また遺いちよちよよて此こゝ年月げんご食く子の主しゆ君ぎみめぐるめるるを
づづささああ語ごりああじじ件けんの食くふをおももるるのし下しも僕おとこ
ささししにに喜よろこびびすすして食くふハあままくく情じやうずず只ただ阪さか女め親おや子こ、
厚あつ志しのの不ふどど感かんずずるるよよああままててととババももととののししとと只ただ管くだ
淚なみだをなままじじ一ひと札しやくををかかじじくく中なか世よととななりりくく食くふハ
粹すい退たいとといいつつみみくく受うごごととババ犬いぬをを郎らう不ふ真まこととと云いふ

乃なりハハささあるある時ときハハ亡なしし又また阪さか女めがが信しん節せつととささずず十じゆ五ご自ぢ
ららとと世よ世よくくひひももななくく我われもも親おやのの遺いんをを北きた月つききき人ひと乃なり
空そらととああららくくてて何なにのの言ことううああんんととてて歎なげ息いきかかりり且かつ且かつバ
のの下しも僕おとこ衆しゆうののごごくくよよととくくささままででののややつつららににををむむるる
ままくくるるままよよハハああままざざれれどどもも一ひと旦たん我われ屍しやく忽たちちちとと哭なひひすす
食くふとと十じゆ五ご年ねんのの星せい霜そうとと経へてて胡こ乱らんるるれれととすす
いいここままははななききももててもも内うち身み親おや子こハハ實まこともも世よにに野のししれれ
異い我われ士し孝こう子このの人ひとななままととババ事ことのの由よし成なり去き度ど乃なり履くししはは
りりとと且かつ且かつににもも裁さい判はんよよままななすすじじままららんん定さだ一ひと肌みみみるるをを
ととててそそののままくく出いささりりがが頃とき刻くわくありありてて食く物ぶつとと推お乃なり来きりり

とくはとまらせんと思ひしとて我家の春うして
下さぬ乃食物とて書きてあつねは
豊と申すは小豆の種とすは小豆の種と
して老ふ小豆の種を種又の種とすは小豆の種と
我又兼の種とていふなまともまらざるなりとて
一椀の小豆もあつて明日はとて語るとしてや
ゆきとて出さるぬ犬を良は耐もど肌も
く張るぬは下僕の下僕を耐もどあつと
一俵の小豆もあつて食ふは百味の飲食と
いふは小豆の味は美なるもことよ夫の

其處とてあつて有まらざるは
は小豆の種とて食ふは何となく物身のや
かしてあつて食ふは忘るは
外は人のその種とて食ふは
まよはるはあつて食ふは
人うもあつて食ふは
白よ今食ふ家の奥は
知れざるはあつて食ふは
よのわらぬはあつて食ふは

あつしずいさうかひちかき胸裏むねに思おもふは是こゝに志こころすまふ及
ずとして二隻の犬乃声こゑ泣なく人のさやうどくふ
う犬を麻あしが母ははよあつくと使つかとにけうバ我われなぐ
奇き異い希け有うの思おもひをばて思おもひめをすまふ我われ幼こ
稚ちのみぎや犬乃乳ち汁じとのまてく生長せいじやうなりこれぞ
自然ぜんと犬の精せい血けつをうあつぎ今いま犬の工くわを成なり
笑わらと使つかう扱さと又また小豆あづきを食た咽のどとさると心こゝろ
志こころく年月ねんげつう思おもひる大おほ突つ忽とちよさ免ゆるてん神かみ訓くみ
小豆あづきと良よ足あ全まく健すなりやう並ならぶ平へい愈いなりあ
不ふと俊しゅんさよと是こゝ大おほハ陽やう秋あきふして冬ふゆと純じゆん大おほ一いつ

小豆あづきハ犬いぬの良よ薬やくよて熟じやく成なりさ思おもすとはつるが今
立た地ちお知ち能のうを見みはゆるこ是こゝ心こゝろと一いつ天てんの祐すけ
所ところよして氣き力りき平へい生せいふまさりされバ今いまもてもあ
是こゝ敵てきふ出で舍しゃせバ多おほく見みせんずるいとやま一いつ
踊おどりあがりて歡よろこひるさして賢けん人じんをすてあへべきお
あへばとひそりよ厨くあいらりてりの下しも僕わがも若わかき世よ
ら急いそぎ家か内うちの者ものを集あつめて救すけ人ひと衆しゆ衆しゆよいら
て見みるあそや登のぼ人ひとえんさ直ただバりかふ是こゝわらふや
と天てん井せいあいの撮とれ下した持もちる人ひとまをなくすこと
搜さがしめたりと跳とさりと思おもひるを彼あかへくとおこしひ

你等ハ眼まなこハコトク奴やつがし系けい々々人ひととそじこの樂たのしみ乃
とまぐとわたり一ひとつたこと眠ねむつまふじが忽たちまちち
樂たのしみの上うへよりその漢まこと鼓つづみと流ながしつゝバをこやとく
大勢たいせいありさきありてさる多おほく小こ多おほく縛はきめりまじ主ぬしの
娯たのしみ人ひとを志こころろてらふやうとまハ是こゝを登のぼりて夜よハ
移うつらず歌うた唄うたよてささじギあうすともさつとて
の免ゆるくとまありつる悪わるさすのしりくやがて我われ多
料りょう取とりもるすじとままで本ほん給たまふ收つか束たばおけよあ
ら地ちちやよき着きせり遠とほぞさうバ又一また一ひと献けん成じやう
りよりすじとて即すなはち坐ま一ひときの内うちよへるまハ人ひとふ

娯人たのしみを引ひきて本ほん給たまふの内うちつま好よろ抱かかり御ごア
つまで出でさりぬは附つ犬いぬを良よハ本ほん給たまふの内うちより火
なく悪わる園えんの中なかにありうごとは娯人たのしみの面おもてありく
とコトへ流ながるよ是こゝ今日けふ志こころづめり御ご件けんの漢まことま
バ你おんこととをえ志こころるやとことむとらるふは娯人たのしみ大
小せう給たまふ身みよりくる悪わる害がいの中なかよて眼まなこ見み
ゆりやと不ふ審しんす你おんも又またいひじて眼まなこ見みゆきだ
こそ我われ面おもてとらるよやと犬いぬを席せきお同どう侍しやくとま娯
人たのしみより息いきのトより我われく代か表ひやくの中なか乃すなはち角かくと女によ
とれば命いのちのきこに何なにとらつとまん罪つみ障さやう穢さい昧まいのなる

よと人向ふてハあるがうばまさまく変化魔
性乃たをひきんさるも己とすうなれ好術
我身へついついよ命と果すなるよとてさーこの強盜
と首と投てくるよ大を良一々笑ていごあるよな
て己とハこははが今中世阪女が一子大を席なり
你よく我親と毒害せんじ己とよ又志のちも怨
このよな作さぬくの怨めとは救身の悪意だ
支且バ我母と殺害するの教のゆゑとさるの
あんすもやるキベーとて刀残らてむぬちよ
ううくせりしおすゆる盗人ハ打止て志とく

待てしとらうづきてる事あり命とてさるる後
申さんとらふ大を席志とくとおぼして己と尺目と
み前漢書よ死心報る恩を収るる薄望よ施す
とらるるあり老子經法花珠林鶴林玉ほ露とあり
せ考るる死心と報るる恩とめとと又徳の二つ
ハあなひよりてゆるさるるとあん我文ハ保るる毒害
おせんじてまぬるよ己とよ体中も況てこそる保
五と親さんじてさるるをあらて害せよ果別を身と
害せざるよ且バ今我母の敵とて若志と一命と
たとく遊とらるるの盗人をひそけらるる

踊おどりてくるおろし犬を席せきひいてとて犬もあきれ
そてなるがさる。ゆてもまわくる変化へんげなるともいふが
内うちにこの意いさるや我われの是こゝろ犬の獲と眼まなこあるはく猫ねこ乃
不ふ変へんとてと出いると等ひとしといひて宝田たから生なり目めさぬ
くまんと長なが船ふねの一方ひとへとぬきそは坐ましきの内うちも踊おどり
へに方かた八方はつぱうふ羅ら立た切きてひらまはぬ奴やつの猫ねこも
る我われ負おて吼う呼こひに方かたもたるとふもちりりす耐
うの犬いぬ猫ねこ眼まなこ梳かきて百もも練ねんの積つみ乃なとくくまるとひら
まはぬ耳みみのねまて割さけて猛もう虎この玉たまき牙はと利と立
我われのこゝろも来きなすか来きも肥うまは存ぞんが母ははと喰く殺ころせ

一いっ小せう竹ちくと又また我われ餅もち食くと犬いぬも来きてとらると吼うけり
て飛とくる犬いぬを是こゝろは候あていふく金かね割わり練ねんの勢いきか
ひとすておてくはバウの猫ねこまゝの復や刃や利り鬼おにの
あゝまゝとるがとく吼うくるふてとらと一いっ折せと飛とはくてぬ
ぬらりととまてぬまてとらとぐんと切きさしはが猫ねこも
腰こしより下したと切きてとらと一いっ折せあると叫こゝろびく獲と眼まなこ
はては震ふる動どうは俄たちに大おほ雨あめぬりきこり一いっむら
く雲くも霧きり下くだるとはくは犬いぬを席せきが髪かみと洗せんんで
そらも引ひあぶんとす犬いぬを良よハ猫ねこもが腕うでととらて引ひ
らさんととらあひが令こん割わりと出いてつらとらておて

むなとと次三刀まで刺はしぬきりまは猫まゝ雷のき
ろくぐとくおちき味て死言ハ怖しなるといふとおろ
かりる歌勢なり大を良家内此者とありて様
下とありこちりるゆまのさきく世家のあや老女が死
骸出らまはま肉のとも乃ハきの歌かりと猫まゝとす
よはぬ是より世家と猫まゝとぞ申かりとせり
そむくは小豆徳ハ東西九里余の地りて右今
孫りき歌討まると大をが現名一日のちちよき
地ま庫の徳と述し大をが孝義勇横志
奇吳の事りとも長者の成室中きこととす

場りまはバ大右郎忽ち一日のちち大徳長者の
身ともつ亡父の奉をまうせて十歳の令ま
近附りまは庫以宛物よりの仔細とす
志ま親阪女と申はて匹父とす
武士も死つとす所成とありて武門の教も
らる大を良ハ是むとす大乃洪恩るまはと大坂
ろの大乃懐と改葬し侍る孤堂も先祖の
系りありて苦挽と吊ひるこれよりてその徳大
徳といふて今もまを徳波の海中に流し
より大も似る石今も出るといふねも又嵐を治と

死い飛ひ一い等とうと申まをして一い仕しをるは侍しやくよはしおき一いが
日ひ救きうるて賊ぞく死しと申まをしぬは侍しやく船ふね中ちゆうよりる時ときハ氣きの
形かたちかゝる也なり嵐あらし崎さきと名なづきた侍しやくよ養やしやうて今いまよあり
さるわどよハ角かく犬いぬを部ぶ正ま照しょうと名なのりては國くに丸まる丸まる
英えい名なとややし兼かね北きた大だい友ゆう合がっ戦せんの時とき救きう度どのかま
と申まをしそ身み生せい涯えんいいここううて子こ孫そん誓ちか目めの
りもといひとよしこことと犬いぬを良らうが孝こうら天てん乃の結むす
と申まをるわたり死し

敵討猫魔屋鋪大尾

跋はく一
数すう部ぶ大だい卷けん片ぺんを乃の中ちゆう一い玉ぎよく川がわらき
足あしとと一いっ冊さつ物ぶつ獸けつ乃の仇あひ討うち忠ちゆう孝かうあり
人ひとををししてて考かうかかううんんハハたたここううが
版ばん本ほんををりり中ちゆう位いもももも覽み玉ぎよくをを
作さく者しやくねねここままのの中ちゆう將しやうもももも猫ねこをを
妻つまをを生せい盡じんるるももももややとと云い云い

文化五年春正月

振鷺亭主人著

蹄齋北馬画

通油甲

村田屋治良兵衛

東武

日本橋新右衛門町

上總屋忠助

書肆

戊辰新啟

慶賀堂藏

巷談坡隄庵

曲亭馬琴著
中本三冊

復雙言猫股屋敷

振鷺亭主人著
全一冊

函山嶺復雙言談

感和亭鬼武著
全二冊

繡像宿直物語

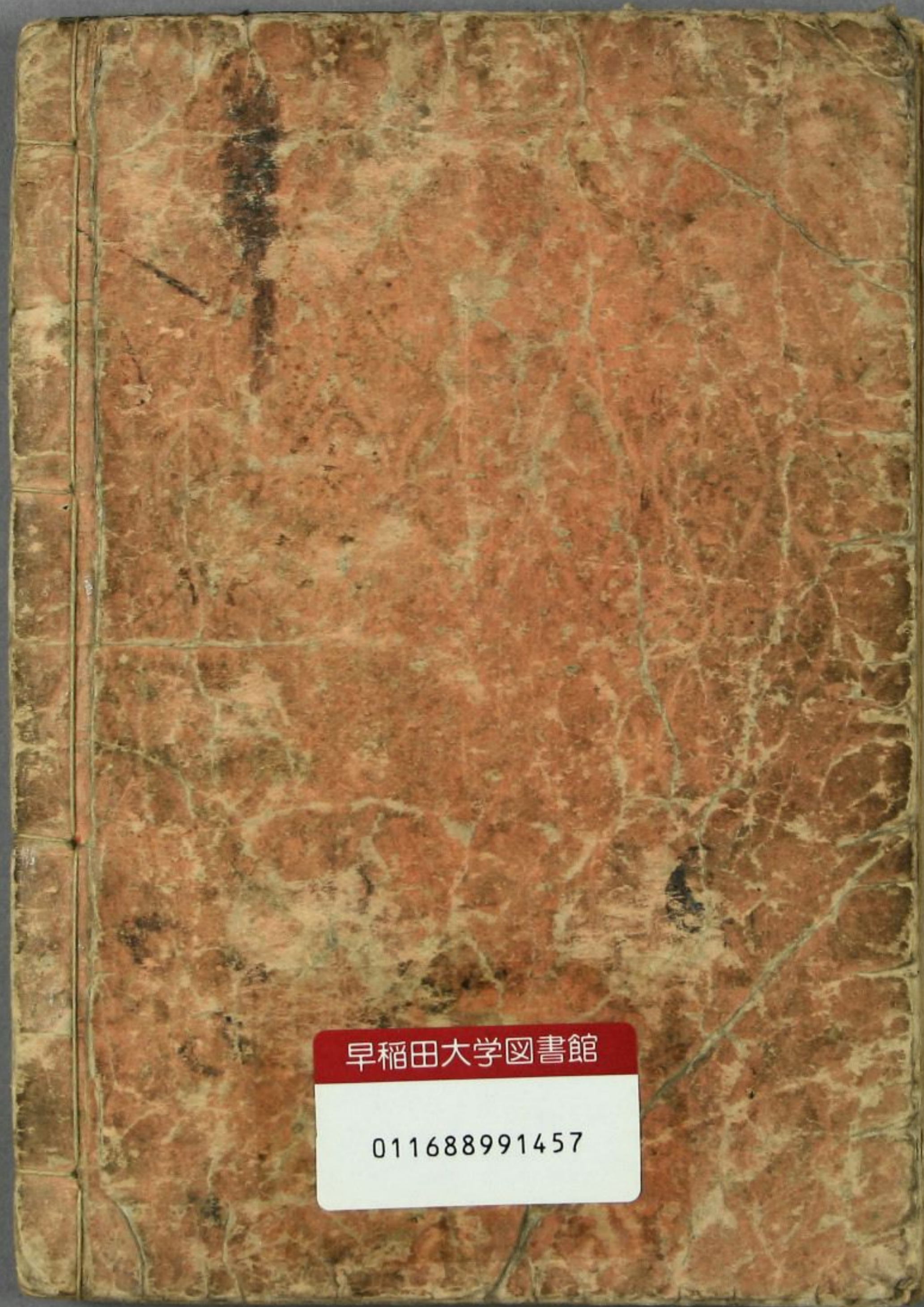
式亭三馬著
全部六冊

孝子美談白鷺鳥塚

十返舎一九著
前後四冊

歌討枕石夜話

曲亭馬琴著
中本二冊



早稲田大学図書館

011688991457